

# 「末期戯作」についての一考察

——『忠勇 栗原百介伝』を読む

石 上 敏

はじめに

現在行なわれている殆んどの文学史に於いて、明治に入ってから  
の所謂「戯作」は、逍遙・二葉亭によって「近代文学」の黎明  
が告げられる迄の過渡的存在か或いは前時代の残喘という低い位  
置しか与えられない。それらは多くの場合、「末期戯作」として  
二束三文で処理され、多くを語られることは少ない。

本稿で取上げる『<sup>(注1)</sup>忠勇 栗原百介伝』は、正にその「末期戯作」  
の、就中「末期」に位置する作品である。本書は、上巻が明治  
十六年十二月二十八日、下巻が翌年二月に刊行されている。版元  
は菱花堂、活字和装中本型の所謂東京式合巻である。題簽は『<sup>(注2)</sup>忠勇  
栗原百介伝』、内題は『<sup>(注3)</sup>忠勇 栗原百介の伝』で、柱題に『<sup>(注4)</sup>忠勇 栗  
原百介の伝上篇』「同下篇」とある。作者古川魁齋子、編集者高  
村瀧一郎、画工芳年、種貞、彫工山本の署名が見える。本文上巻  
四十四丁、下巻五十四丁。『国立国会図書館蔵明治期刊行図書目  
録』に拠れば、翌十八年四月に第二版が出版され（菱花堂）、さ

らに同二十年十二月（精文堂）、同二十一年八月（市川かめ刊）  
と版が重ねられた。また、同三十一年三月には招林百燕の講談速  
記が萩原朗月堂から出版されている。

古川魁齋子は、本名精一。古江山人・鬼斗生（子）・竹の屋雀  
等の別号を持ち、幕府旗本の士古川吉左衛門の長子として安政元  
（一八五四）年に生まれた。明治八年魁新聞に入社、翌年東京絵  
入新聞に転じ、大阪此花新聞、神戸又新日報にも関係した。明治  
三十年代に実業界に転じたが、再び筆を執り同四十一年八月二十  
日に五十五歳で歿している。二世春水染崎延房を師として人情本  
風な作を得意とし、また岡本起泉・櫻庭簾村と、当時の、三才子  
と並び称されたという。代表作に『花衣胡蝶廻彩色』（明18・5  
駿々堂）、『逸山城』『みだれ萩』『深見草』等がある。<sup>(注5)</sup>

『<sup>(注4)</sup>忠勇 栗原百介伝』（以下『百介伝』と略記する）は、文政五  
（一八二二）年に起った農民一揆に取材した、所謂「お家騒  
動物」である。ところが『百介伝』に描かれた騒動は、多くの「実  
録」と称する歴史に材を採った小説がそうであるように、堅実に

史実を踏まえたものではない。換骨奪胎され潤色され、史実とはかなり異った趣を示す。

本稿では、この実録物に注目し、史実と虚構との比較検討により作者古川魁雷の「意識」と「方法」を通して、新文学の抬頭を目前に控えた明治十六年当時の、「末期戯作」のひとつの在り方について考察を加えてみたい。

## 一、『栗原百介伝』について

本書は、東京絵入新聞に八十六回に亘って連載された所謂「続(注5)き物」を、上巻十三回、下巻十五回の計二十八回に章立てて編纂したもので、単行本に於ても各回が独立した「続き物」の体裁を取っている。(注6)序文に言う「本務の余暇の取筆ゆえ時好に後れん事を畏れて其編集は同子(注7)(注・高村蕩一郎)に托し」という編集形態が、どの程度のものであったかは明らかでないが、上巻末の附言や誤植の数、「与吉↓利吉」「安藤林兵衛↓斎藤林兵衛」等の人名を始めとした内容の齟齬等を見るに、編集に費された時間は少なかつたと見る事ができる。

さて、本稿の性質上、『百介伝』の全体像を把握してもらう目的で、以下に『百介伝』の粗筋を紹介したい。(①②③は、第一回から第二八回までを示す)

①丹後国與謝郡宮津城主松平伯耆守に家老として仕える栗原理

右衛門の妹お貞は、若州小浜城主酒井侯の家臣岡見左膳に嫁ぎ、主馬之介を儲けるが、左膳は程なく世を去り母子は実家へ戻り、理右衛門の妻子権兵衛に文武共に勝る主馬之介は、若君大隅公の目にとまり側近に召される。

②主馬之介改め辰五郎は栗原家の家督を命ぜられて理右衛門を名乗り、因州家長臣水野の娘お牧との間に百介を儲ける。百介は藩内屈指の武術の実力を認められて、伯州公を襲った若君と共に十六の歳に江戸へ上った。③百介は、盜賊迎を退治したり狸の化物と格闘したりの活躍をするが、④息子の身を案じた父理右衛門に呼び戻され、お八重との縁談が組まれる。親の真意を悟った百介は、忠勤に励み中老職に昇進した。

⑤ところが、先代の病没を期に二三の臣下が奸策を回らし始めた。奸臣に取り入れられ驕奢を極める若君の入国を待構えて諫める理右衛門は塾居を命ぜられ、農民からの取立ては日を追って苛酷さを増すのであった。⑥赦されて家老に進んだ理右衛門だが、ついに大挙して城下へ押しかけた農民達を日頃の信頼によって押し留めた事件を契機として、父子共々投獄されてしまう。一揆を仕組んだのは謹慎中の理右衛門であり、あれ程容易に引き返させたことが証拠であると巧みに君公に言い寄る奸臣の中には、嫡子の座を追われた関川権兵衛の姿があった。⑦血氣盛んな百介は、懇意の牢番・義平の助力で雪中を脱獄し、母と妻子に今生の別れを告げ、事の次第を奏上すべく江戸を指した。⑧小舟の転覆で九死

一生の百介は、理右衛門が世話になった大島村の名主・仁助に匿われ半年余りを山小屋で過ごす。⑨仁助の娘お信の願いで町に下り、叶わぬ恋に心中を計るお信と与吉を助ける。⑩一方、牢番義平は捕えられ、拷問の末処刑される。⑪お信と与吉の結婚を親に認めさせた百介であったが、密告により再び追われる身となった。⑫隣國へ逃れた百介は、忠平宅へ滞在し、忠義を識る因州公より金子衣服を拝領するが、宮津へ戻って身を返し時宜を待とうと決心する。⑬仁助宅には捕手が差向られ、お信は父と百介の無事を、寒中の水垢離で神に祈るのであった。(上編)

⑭与吉が役所からの呼出しに駆付けると、取調方の交替により仁助は釈放される。⑮百介は山中で狼に襲われている庄屋良右衛門を救い、薬応を受け、久し振りに枕を高くして眠るが、周囲の騒がしさに目醒めると何百人もの組子に包囲されているのであった。⑯寺に逃込んで僧侶に匿われ、迫る追手に、百介が思わず階段を踏み外し、ハッと気付けばそこは良右衛門宅の二階であった。⑰奇しくも仁助の弟であった良右衛門から、義平の刑死とお牧、お貞の相次ぐ死、理右衛門の警固の強化、仁助の投獄などを聞いた百介は夜半密かに闇に紛れた。⑱亡き祖母の墓を、その郷若州小浜に参り、近江路を江州森山へ至る。機織屋紅屋で四、五日休息し、彦根へ向かう百介は、恩ある彦根藩士井上と会い、城下近くで刺客を討つ。⑳彦根公からの執拗な仕官の勧めを一度は断つたものの、㉑増々嚴重になる探索と百介を藩士にすべく巡らされ

る策略に、思い余った百介は二君に見えることを深しとせず、森山八幡社の裏手にある墓場で自ら果てた。

宮津に運ばれた死骸は処刑場脇へ埋められるが、一夜の内に石塔が建ち、遂には参詣人が群れ集うようになる。

㉒百介の死を知った妻子の悲しみは一通りでなく、㉓義に感ずる栗原家出入りの大工庄五郎は、連判状を持ち天領目指して出発するが、意を遂げずして奸臣からの間者に惨殺されてしまう。

㉔父の所業に思い余った伯州公の嫡子さえもが意見をし、勘気に触れて江戸下屋敷へ送られ、百介ばかりか妻子までも、亡きものにしようとする奸臣の手から遁れて一家は江戸へ落ちる。㉕長男直太郎改め兵馬は、母お八重の下でその教知を頼む若君に俱して宮津へ入る。㉖老臣沼田庫之助・柴田要らの尽力により、さらに伯州公の病死によって、後を継いだ若君の恩典で、理右衛門は三年振りに念願の出陣なる。関川権兵衛は切腹を命ぜられ、他の奸臣等も家財一切を没収された。百介の葬儀には、仁助親子・良右衛門・紅屋等を始として、数百人が集い、君公直々に戒名に「殿」の字を賜わる程であった。

㉗理右衛門は江戸に上り、暗れて孫達に対面する。㉘実は老臣の密かな命により百介を助けるために、壮士安藤一郎が遣わされていたのだが、その尽力も叶わず安藤は出家し、断食を全うして往生する。㉙孫達に囲まれながら理右衛門は生を寫え、お八重は三男主馬之介に死んだ人々の菩提を弔わせ、また自らも弔いなが

ら、子供達の栄達を見届けて眠るように死んだ。

八幡社の裏手には栗原稻荷が建ち、百介切腹の日の祭礼には、毎年多くの人々が参り集った。明治に入っても百介の芝居が行われ、石碑建立の計画が着々と進んでいる。

(後編)

『百介伝』は、以上のような、儒教道徳を軸とした勧善懲悪主義に、伝奇・人情・復讐・勇婦・因果……と種々雑多な要素を絡めた活劇の様相を呈する。全編は、作品の舞台である日本海を思わせる沈んだ色調で覆われ、背景には冬や夜・雪や雨などが好んで使われる。登場人物は五〇名を超え、また図1に示すように、時間的構成にもかなりの工夫が払われるが、作者はそれらの総体を消化しきっているとは言い難い。

本編の主要登場人物中、史料によって、実在の人物として確認できるのは、丹後松平伯耆守川本庄流松平氏(官津七万石)八代大隅守宗允、同九代伯耆守宗發、同十代伯耆守宗秀、丹後官津藩後見役栗原理右衛門、藩士栗原百介、関川権兵衛の六名ということになる。

## 二、虚構と史実のあいだ

では、『百介伝』の取材した官津騒動とそれに続く栗原父子投獄、百介脱走の史実は如何なるものであったらうか。幾つかの

史料に拠って『百介伝』との比較を試みたい。

本稿の調査には、

I 丹後史料叢書・第一輯『官津騒動夢物語』文政七年十二月、

明治七・八年頃写、大正十五年二月刊

II 同・第二輯『農民蜂起與謝断』慶応三年一月写、大正十三年

十月刊

III 同・第九輯『官津旧記(追記)』文政二年補「官津領内一揆  
強訴之事」

IV 『文政年間丹後大騒動』小池松治著 大正七年二月十日

V 『旧官津藩「文政百姓一揆」の話』岩崎英精著 昭和二十七年

年一月十五日

VI 『丹後官津誌』復刻版 大正十五年與謝郡官津町役場編纂、

三康図書館所蔵本 昭和四十九年二月十四日発行 「第二編

第四章・官津の所屬 第二款・官津の治安」

VII 同 「第五章・官津の政治 六・本荘氏」

を用いた。以後特に注意を要する箇所は、I～VIIの記号を付して示す。

先ず登場人物の設定に見られるいくつかの問題から見てみよう。

『百介伝』中に、初代理右衛門の実子とされている関川権兵衛は、実際は妾腹の、二代理右衛門にとっては義弟であり(II)、百介の子供は三人であるとされている(II)『百介伝』には子息九歳を頭として男子三人あり)。

また栗原家出入りの大工庄五郎には、宮津藁屋町の大工、長五郎というモデルがあり、長五郎は一揆の主謀者のひとりとして、文政六年二月十六日に捕縛され、翌七年四月二十二日に永牢の判決を下されている。<sup>(注9)</sup> (Ⅱ・V)

百介の妻子は「大原庄右衛門へ御預け」(V)となり、家老「沼野較之介」は「家老職として栗原親子を牢せしめたる不行届のことより申訳なくて切腹したるなり」とされる。(V)

さて、史料の検討によって『百介伝』中特に問題となるのは、①百介の脱走と②一揆について、そして人物としては③関川権兵衛と④伯耆守(九代宗發)の扱ひ方という四点であろう。

①百介の破牢については種々の説があり、<sup>(注10)</sup>その孰れが正しいものであるかは詳かではないが、その逃走経路と日時については追跡が可能である。また栗原稻荷が実在し、墓碑銘も明らかであることから、切腹の日時と場所についても、確認することができる。

史料と『百介伝』についてそれらと比較すると表1・図3のようになる。史料の比較が物語るように実際は脱牢後十三日目に切腹が行なわれているのに対し、『百介伝』では切腹までに三年の月日を設定してある。これは第一に十三日間では物語の構成上、百介の活躍を、大きく展開させるのが難しい事、また獄中で三年間を過ごさせるのでは、余りに作品に描かれた百介の性質とかけ離れてしまう事等が考えられるが、いずれにしろ脱獄僅か十三日目に追詰められ切腹を余儀なくされるという本来の筋では、作品は

成立しなかった。

ただ、「文政九年二月十六日」という史実をどうしても踏まえなければならぬという点、「近江国八幡町」を終点とした逃走経路から、余りに不自然な遠方にまで百介活躍の場を設定することの出来なかつた点に、この作品が「実録」として成立する為の条件があつたと言えよう。しかしこのことは逆に、「文政九年二月十六日」を始めとする。史実としての要所<sup>11</sup>を押えることによつて「実録物」の看板を高く掲げることが可能にし、作者が却つて作品を展開する上での自在さを手に入れることの出来たことも意味している。

また、知人の多い同地方に舞台を限定することにより、「善因善果」を旗印とした「偶然の出会い」による狂言回しが多用できる事等、「本物らしさ」を織り込むことによる効果をも作者は狙っている。

②『百介伝』における一揆の取扱いは極めて素気無い。それも、理右衛門に「君が一日の過ちは臣下に及んで百日の嘆きに当る」と語らせ、「苛酷の仕向の重なりしに」「家族を糞ふ事もならず」「取立かたは日を遂ていよ／＼厳しく」「月を重ねて領民へ年貢運上何くれと重く課税を掛たるに」と自ら記しているのにも拘らず、「中には良からぬ者も交りてゐれば人に魁けせられんより、<sup>た</sup>本村は本村で一日も早く訴へ出るがましと煽動されて思案もなく竹槍席旗で押出し」「掛りの役人一同を打殺さんとひしめく<sup>ま</sup>態は容

易ならざる」猛りに猛りし領民輩は服する気色のなきのみか」  
「四の五のいはず打握ろと異口同音にわめき立」と無秩序・無軌道な騒動を演じさせ、『渠等のなせる挙動は悪むに余りありとはいへこれを制すに兵力を借ては他家の聞えも悪く第一君侯の御仁徳の薄きに似たれば仰りながら暫時のうち君侯の御威光を借り率つり愚臣が今一応一同へ寫と説諭したし」と、『民』ではなく「君」を慮つて登場した理右衛門によって一揆は「容易く解散」してしまふのである。そこには一揆に至るまでの大小様々なる問題に対する批判意識は何一つ見られず、『百介伝』において一揆は奸臣達による栗原父子投獄のきっかけを成すに過ぎない。この一揆の背景には、史書が説くように、宗發が栄達の為に行なつた「万人講」を始めとする搾取・他に列を見ない程に整然と統制された計画的な一揆形態等閑却視し得ない経緯があつたが、古川魁椿はそこから大きく目を外している。一揆をめぐつても、農民を宥める為に村々に配布された偽の「覚」や、前述した大工の長五郎を始めとする義民達の処分等は『百介伝』では描かれず、一揆の全体状況は余りにも単純に図式化される。善玉を持上げる目的で、「因果」という強い接着剤を巧妙に使いながらあらゆる要素を配していく方法に限って見れば、それは前代から何の進歩も示してはいない。ただ、単なる描写、或いは素材の取捨としての一揆の取扱いと言うよりも寧ろ作者は強いて一揆に民衆を無視しているように見える。(この点については後節で問題にする)

③本編中最大の悪人関川権兵衛は、史実において民衆の味方であり(Ⅱ・Ⅲ)、搾取の実態について民衆に知らせ一揆発生の源泉となつたのは実は彼であつた。という事は藩幕藩体制の側から見た叛逆者であり、『百介伝』で出自を操作されてまで大悪人の座に収めた点にも、作者魁椿子をして『百介伝』を書かしたところの意識の一端を窺うことができる。ただし、関川権兵衛については史書・伝説の中に「悪役の座」への道が用意されていたとも言える。Ⅱに「(関川権兵衛は)御吟味に及べば此人狂気の如くにて度々口交り正体なし、婉なく揚り屋へ置かれたり」  
「然るに関川権兵衛の申立が吟味毎に取止めも無いことを口走るのみでなく其挙動が亦普通人で無い。察するに関川は一揆露見を危惧した結果、精神に異状を來し発狂したものに相違無いとの鑑定の下に竟に其儘揚り屋へぶち込」まれ、Ⅳでは破牢して義兄理右衛門の家に逃げ込んだとされており、その「関川権兵衛逃込み一条」が栗原父子投獄の要因を成したという。さらにⅣには、栗原投獄の要因として、一揆の発生以前に理右衛門が「歴々諸士の會議」で「政治上の実権を握っていた沢辺による日銭献策(注・万人講のこと)に横鎗を入れて中止を企てた一条」「一揆徒党が取鎮めの三奉行に対し悪口雑言を浴せ栗原を神の如くに言い難した行動」さらに「栗原の印形を押捺して領内村落一般へ急飛脚を以て告知すると同時に恰も掌を返した如く立所に一揆終熄を告るに至つた一条」で「平素家中藩士より」「兎角の批評を立てられ

て」おり、関川が「栗原家へ逃込」み、「一揆強訴の主謀者為次郎が関川家に元下儀率公をしていた」点から、「藩中歴々の巫中に至るまで竟に栗原一家を恠との疑雲」を受け「終に一揆主謀の嫌疑を以て格録取上げ」られ、「牢舎に均しい座敷に押込められ」たと詳しく経緯が述べられ、それは「百介伝」に近いものとなっている。元来ⅣはⅡを増補潤色した「増補与謝断」を底本としており、史実としての信頼性はかなり低くなっていると見ねばならないが、Ⅳを見る限り「百介伝」のような形で「奸臣」を登場させる素地は既に十分であったと言えよう。

ただ、同じくⅣに、「一説に曰」とし、「関川権兵衛なる人物は却々思慮分別に富んだ智有り情有る真の武士であった（中略）百姓の困苦を思ひ遣り罷違へば関川の一家を棒に振る覚悟を持して窃に采配方の総大将となつて（中略）一揆強訴を容易ならしめたのは皆この関川なる人の指図に出たものである」という説が附され、いくつかの例証を掲げた後に、「諸点より綜合して推測するときには此説強がち牽強付会の説とも見做されぬ」と記されている点も見落としてはなるまい。

④関川権兵衛の因果復讐譚を軸として奸臣達という悪玉を配し、宗親の悪政を、巧妙に正当化する作者の方法は徹底している。登場人物の意識を超えて、作者自身が國（藩）や君主に熱っぽく忠誠を誓い続けるのは表3のaに見る通りである。

### 三、「栗原百介伝」の時代背景

明治八年六月の新聞紙条令「無<sub>(注15)</sub>ヲ有<sub>(注15)</sub>トシ虚<sub>(注15)</sub>ヲ実<sub>(注15)</sub>トシ心<sub>(注15)</sub>ヲ煽動シ衆耳<sub>(注15)</sub>ヲ掩蔽ス等ノ如キ造説ヲ禁ズ」に象徴されるように、実学尊重の世にあつて「虚構性」は排斥され（そのため却つて民衆の

「虚」に対する欲求は昂まつた）「虚構の実録」の楮期に於ては、「勉めて其実蹟を綴り毫も架空の説を雜へざる」（岡本起泉

『其名も高橋(注17) 東洋奇聞 明12・2——七篇序）、「架空無根のはなしにあらざ（中略）其事実性においては聊かも原意にたがふ事な

く」（坂名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚 明12・2——初篇下）というように事実性尊重を強調するという隔れ笈を用いる必要があつた。しかし、数年を経た『百介伝』にあつては殊更事実性を強調する必要はなかつたらしく、「続き物」で「虚」と「実」の塩加減に慣らされてきた読者との間には暗黙の了解が成立していたことだろうし、「続き物」は再び「実」へと揺戻されることなく、一方向的に「虚」へ傾斜していく。その坂の先が所謂大衆小説にながつているわけである。

明治十年代に入り、自由民権運動抑圧のために政府は対民衆政策の方針を急転換させた。即ち儒教道徳の復活がそれである。宿命というよりは条件反射として、体制の機を伺うに敏なる戯作界では、『岡山紀聞筆の命毛』（転々堂主人「芳譚雜誌」明14・4〜明15・3）のあたりから「仇討物」「お家騒動物」の流行を迎え





への思い入れとは逆に『東京絵入新聞』の人情本的傾向に擬り師を染崎延房とする魁奮の本領は人情本作的作風であったと言つてよく、「斯とは争でしら真引に引れず承込し」<sup>（註）</sup>「日は西山にいり相の鐘の音幽かに聞えし折」といった人情本独特の節回しが作中随所に見受けられ、その筆の滑りは、教訓的場面に比した場合は、明らかに精彩を放っている。（①―④一例、以下⑤―⑦、⑧二、⑨九、⑩一、⑪一、⑫一、⑬一、⑭一、⑮二、⑯一、⑰三、⑱一、⑲一、⑳一、㉑三、㉒二の計三七例）いま一つ考えねばならないのは、本編を蝕んだ「新聞小説」としての立場である。即ち林立競合を続ける新聞・雑誌界にあつては、先ず何よりも読まれることが先決という商業主義を背景に、趣向から趣向へと近視眼的な軌跡を選んだ夥しい「読物」の、本編も例外ではなかった。読者の要求―出版母体の要求を顧慮し「読まれること」を念頭に置いた筆は、間歇的に発作じみたクライマックスを繰り返し、「全体としての作品」という意識は低い。結局、作品に需められていたものは、確実な構成や作品世界の創造・問題提起と本質の追求などではなく、少なくとも次回（『百介伝』は週四話平均で連載）まで読者を引き留めておく趣向以外の何物でも無かつた。

一冊の作品として編集されながら尚、「第一回」「第二回」と区別を設け、「次回は……」で結ぶ所などに、根強く「読者への配慮」が残っている。

ただ、『百介伝』の場合、細部の破綻をも敢て辞さない魁奮の

一心不乱さと、ポーズや方便ではない「儒教道徳」への真の喝仰が、本編を単なる官能的・類腐的な娯楽作品とは異なつた場所に押出した。報道性から娯楽性へという時代の流れに乗つて多くの新聞小説が書かれていた中であつて、これだけの生真面目さで「勸善懲惡」を説く姿勢は、特筆すべきだろうし、少なくとも「興味本位」の一言で片付けられる作品ではない。

ともあれ、様々な趣向や時宜を得た内容が、勿論いくらかは割引いて考える必要もあろうが、作者に言わせれば、「江湖諸君の喝采を得たる」（上巻序文）、「おもひの外に世にもてはやされしより」（下巻序文）という読者の反応を喚起し、何度も版を重ねさせたのであろう。

※本稿を草するに当り、宮津市の岩崎英精氏、岩瀧町・蒲田桂三氏を始めとして多くの方々の助力を得た。ここに感謝の意を表したい。

（注）

1 『大人名辞典』（下中弥三郎編・平凡社）ではクリハラモモスケと記すが、地元ではクリハラヒヤクスケと呼ばれている。筆者もヒヤクスケに従いたい。

2 奥付には「同年二月」とあるが、連載時期より考へて、これは

- 「同十六年二月」の誤りであろう。十七年以降も考えられない。
- 3 「大人名辞典」は、「著作の小説は（中略）十数種がある」とするが詳かでない。興津要氏は筑摩書房刊明治文学全集2『明治開化期文学集(1)』（昭42・6・30）で「彼署名の著書は（中略）毒婦物『花夜胡蝶廻彩色』（一八年五月）があるくらいだった」と述べている。至文堂新版日本文学史8『年表』にも『花夜…』のみが見える。
- 4 本稿の調査に用いた初版本（岡山大学池田家文庫所蔵）は国会図書館にも見えず、その保存状態からも資料として貴重であると思われる。
- 5 明治十六年六月六日（水）第二三九一号〜同十月二六日（金）第二五一一号
- 6 第四回「次回に説くを見て知るべし」、第九回「其趣きは次回にゆづる」等。
- 7 「版元の発兌を急ぎたるより（中略）編者に於ても甚だ慚愧に堪ざる處なり」云々とある。
- 8 永浜宇平氏による付記に「惟ふに天保年中に原本は作られたるものならん」とある。
- 9 一揆における民衆側の立場について徹底的にこれを無視した作者が、「義民」としての性格を借り、百介側にこの人物を造形した点が注目される。
- 10 Ⅲに、「以前栗原榎御引立之足輕上田光右衛門、高橋喜太八

と申者（中略）兩人喋し合せて揚屋御脱出之手引致し候」、Ⅳには「百助は不日唇腹を申附けられるか然らざれば関川同様斬首に處せられるかの説が伝はったので、備助は今一刻も猶予成難くと斯くは百助救出しに忍び込んだのであった」などである。

11 一揆は文政五年十二月十三日深更から、十八日早朝までの六日間にわたった。

12 七才以上七十才以下の領民五万二千六百四十三人に対する一人一日当たり三文（後に二文）の人頭税。

13 Ⅴには「以上の日銭、先納米銀、御用銀類を一括すると（中略）すなわち収獲した米穀のすべてを換銀しても、とうてい納め切れぬ負担であり」とある。

14 以下にその全文を掲げるが、農民の要求が何処にあったかを看取できるであろう。

#### 覽

- 一、万人請日銭御免事
  - 一、諸御頼壹万五千匁御買上ケ米御免事
  - 一、当年為御取扱米千匁被下置事
  - 一、奉公人増給御免之事
  - 一、七人被召捕候者御免之事
- 前書之通令承知相違無之事也

午十二月 栗原理右衛門（御在判）

惣百姓

水吞江

15 興津葵著『転換期の文学―江戸から明治へ―』早稲田大学出版会（昭46・4冊三版）の指摘による。

16 明治政府の施策との関連上、明治十二年から十三年にかけては史実重視の「実録」から虚構の占める割合の大きい「虚構的実録」への、丁度過渡期に当たっている。

17・18 15に同じ。

19 表題でもある主人公を、作品の概ね三分の二に当たる時点で自刃させてしまうのは、本編の構成を考えるといかにも不自然で不安定に思われる。

20 「アイデアと執筆」という形で、一時「分業」を行っていた延房・魁蕃の師弟であってみれば、その文学的体質は近いと見ることが出来る。また「お家騒動物」は延房の最も得意とする分野でもあった。

（本文表は50ページへ）

### 研究室受贈図書雑誌目録Ⅲ

国語国文 第十二号（宮城教育大学）

国語国文学研究 第十七号（熊本大学）

国語国文学会誌 第二十五号（学習院大学）

国語国文学会誌 23（福岡教育大学）

国語国文学誌 第十一号（広島女学院大学）

国語国文学報 第三十九集（愛知教育大学）

国語国文研究 第六十六号、第六十七号、第六十八号（北海道大学）

国語国文論集 第十一号（学習院女子短期大学）

国語国文論集 第十一号、第十二号（安田女子大学）

国語表現研究 創刊号

国際日本文学研究集会会誌録 第五回（国文学研究資料館）

国文学 第五十八号（関西大学）

国文学会誌 第二十五号（新潟大学）

国文学研究 第七十六集、第七十七集、第七十八集（早稲田大学）

国文学研究 第二号（群馬県立女子大学）

国文学研究資料館紀要 第七号、第八号

国文学研究資料館共同研究報告 I

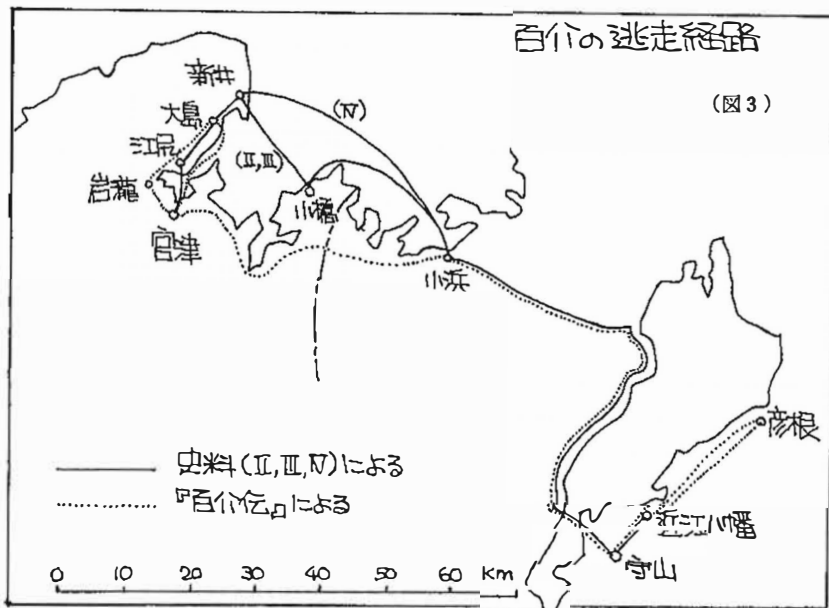
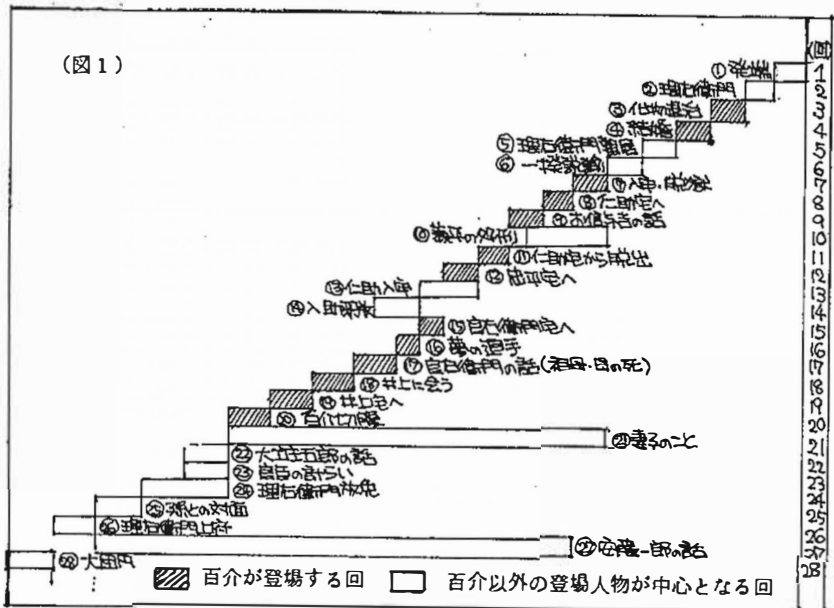
国文学研究資料館講演集 3

国文学研究資料館第16回公開講演会

国文学研究資料館報告 第七号、第八号、第九号

国文学研究ノート 第十四集（神戸大学）

国文学攷 第九十四号（広島大学）



(表1)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	計	(i)
1	1	2	2	1	1	2	1										10	6.3
2	1	2		1	2	3	2		1	1	2						15	3.5
3												3	1				4	16.8
4					1				2	3				1			7	6.6
5	1	2	1		6		1		1	1	2		3	1			19	2.4
6		4	2	1	5					1							13	6.3
7				1	3				2	2					1		9	7.8
8		2				2		1							1		6	8.2
9			4			2		1			4		2	1		1	15	9.1
10			1		1												2	16.0
11			2			1		3	1	1	2	1	2	1		2	16	8.5
12			2			1		1			1	1				2	8	9.6
13		1				1			1	3					2		8	6.9
14			1						1	3			1		2		8	14.8
15					1	3			1	1		1	1				8	9.0
16													1		1	1	3	23.3
17					2					1			4				7	11.7
18						1				1						1	3	22.7
19		3			1	1		2			1		2			1	11	7.0
20		2				1		2					1	1		1	8	7.5
21						1		1	1	2	3		1				9	7.4
22					4	4					1	1				3	13	6.2
23			1		3		1		1	1			1	1		2	11	6.7
24	1		1		6	2		2			3		1			2	18	5.1
25	2	2	2		3	3	1	1	1		1			1			17	3.5
26	1			1	4	1			2	1		1	4	1	1		17	5.3
27		3			4	2						1		1	1	2	14	7.5
28	1	3	5		2	2	2		1	2	3		1	1	1	2	26	3.8
計	8	26	24	5	49	33	8	13	16	25	23	9	26	10	10	20	305	7.0

(圖2)

